
黒いシト

シ者 カヲル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒いシト

【Nコード】

N1577Z

【作者名】

シ者 カヲル

【あらすじ】

平均的な体型、平均以下の運氣。平凡な人生を送っていた青年『黒石透』は、駅の歩道橋で何者かによって殺害されてしまう。そして彼は、『死後の世界』の真実に触れてゆく。そして天敵、『霊媒師』との壮絶な戦いが始まるうとしていた……。

『死』、あるのみ

「なあにやってんだ馬鹿者！！この休日に関何をしていたのかね！こんな企画書で通るとでも思っているのか！！」

バシィ！と勢い良くデスクに叩きつけられる企画書。

ここはとある製品会社、の製品開発部だ。

最近の不景気のせいで、元々20人いたのだがここ2ヶ月で11人にまで減っていた。

すなわちリストラ。リストラクチュアリング。正式名称は「Restructuring」。「再構築」という意味なのだが、雇われている側からしていい意味で捉えることは不可能である。

そこで。この11人という田舎サッカー部のような人数で形成されている開発部に、またもうひとり、消えようとしているロウソクが一本あった。

「す……すみません……。久しぶりの休日だったんで……舞
い上がっちゃって……」

「……………はア……。いつもいつも失敗の度に言い訳ばか
り。なんで君はこうなのかね。初心に戻ってみるか？」

そういつと、全身脂ぎった肥満体型のボテボテ部長は、自分の首
元を親指で搔つ切る仕草をする。

「そ……そんな！酷いですよそんなの」

と、必死に口論する青年。火が消えかけたロウソクだ。

「……これからは絶対気を付けますから！だから今回だけはお許し……」

「もういい」

部長は、遮るように青年に言い放った。

「明日から、いい休日を過ごすように」

くるりと回転椅子を反転させ、ひらひらと手を降る部長。

キラれた瞬間だった。

*

(ンだよチクショウ。キモツち悪い体しやがって。クソが。だから一生童貞なんだよゴミクズ体型オヤジ)

と、いくら思っても言葉には絶対出せない臆病青年、黒石透^{くろいしとある}。

彼は髪形、体型はまあまあ。平凡な成績で中学・高校・大学を卒業し、恋にも恵まれず、世界中の人間を全て足して2で割ったような男だ。

そして、彼はついさっき就職して半年程の会社をクビになったところだった。

（また就活とか嫌だわ……。どんだけ割り切ってあの会社入れられたんだろう……。ホント不景気死ね！）

ゴチャゴチャと頭の中で喚きながらトボトボ駅へ向かう。

（これだと母さんに合わせる顔がねえや……。帰りたくねえなあ……）

『一番線に電車が通ります。黄色線の内側より下がって……』

聞きなれたアナウンスが聞こえた。

でも、いつもより駅のアナウンスが遠く響くように聞こえる。

（なんだ……。この感じ……。いつもはもっとしっかり立っていられるのに。今日は無駄にフラフラする）

会社をクビになったことがそれだけショックだったのか、と透は思う。

右耳に、電車の走行音が響きわたる。

ふと足元を見ると、自分は黄色い線の外側にいた。

「ちょー！うわぁ！」

あたふたと尻餅を着いた瞬間、目の前に電車が猛スピードで通り過ぎていった。

「・・・ハア・・・ハア・・・。一体なんだってんだよ・・・」

ざわざわと周りの人達が透の様子を見つめていた。

尻餅をついたまま、彼はポリポリと頭を掻く。

ハッと、意識が覚めるといつのまにか自分はいくつ目の駅にある

大きな歩道橋のど真ん中で突っ立っていた。

いつもならここから家に徒歩で直行なのだが、何故か今日は家に帰れる気がしない。

「つたく・・・頭痛え・・・早く家に帰っちまおう」

頭を押さえながら、ふと前に目をやる。

行き交う無数の人間達。飛び交う様々な音。

そんなものを全て無視して、それはこちらに近づいてきた。

全身真っ黒の服で纏い、大きすぎるフードをかぶった男。

手を、つつこんでいたポケットから出すと、少し小走りになって近づいてきた。

そして。

ドン、と。相手の右肩と透の右肩がぶつかる。

(ンだよ……いってえなあ……)

振り返ると、その男はもういなかった。

疑問が頭を過ぎる前に、彼は異変を感じる。

ポタ・・ポタ・・と、なにかが滴る音がするのだ。雑音まみれの
この場にも負けずに。

腹部に目をやると、自分の腹から何か取手のようなものが生えて
いた。

(ナ・・・イ・・・フ・・・?)

腹を押さえると、グチュリと果実を潰すような音が鳴る。

同時、ドクドクと赤い液体が自分の体を伝って地面に溜まっている。

(ひ・・・ぐう・・・)

バタリとその場で倒れ込む透。

(たす・・・け・・・てくれ・・・だ・・・れ・・・
か・・・た・・・の・・・)
・・・

その日、黒石透は死んだ。

『破』、あるのみ

人は必ず死ぬものだ。

その死に様は人それぞれであり、当然被ることだってある。

不意の交通事故での『事故死』。

不安定な足場からの『転落死』。

ナイフで刺され『出血死』。

突然の発作からの『ショック死』。

その裏側だってある。殺害方法だ。

刺殺、絞殺、撲殺、圧殺、斬殺、抹殺、暗殺、薬殺、毒殺、射殺。

条件さえそろえば『笑殺』なんてものもある。

ところで俺は、なんで死んだんだろう。

たぶん『刺殺』だ。腹になんか刺さってたもんな。

ん……………つか……………

「なんで俺生きてんの？」

透とあは、何故かまた、歩道橋のど真ん中で突っ立っていた。

自分が死ぬ前の風景。しかし、あのフード男はいない。

変わらない人混み、変わらない景色。

何もかも変わらないように見えたが、

ここで異変が起こっていた。

音が聞こえないのだ。

ガヤガヤと騒がしい駅の歩道橋のはずなのに、まるで暗闇の中で突然テレビの音量を0にされたかのような悲壮感。

「ど……どうなってんだ……」

しかし、自分の声は聞こえる。逆に言うと、自分の声しか聞こえない。

しかも周りの人間は動き回っているのに、一切自分にぶつかる心配がない。

自分がよけているのではない。周りの人が避けているでもない。

まるで呼吸するかのように、脳が無意識にそうさせているのかのようじや。

この異常な空間に、彼は恐怖した。

自分がさっきまで生きていた、なんて気がしない。

(これが・・・・・・・・・・「死んだ」ってことなのか・・・・・・・・)

透はふと、自分の手元を見る。すると、

「うわっ!?!?!」

ポウツ！！と自分の右手から青白い炎が吹き出した。

その炎は空高くへと昇ってゆき、やがて溶けるように消えた。

「な……なんだったんだ……今の……」

思考する暇もなく、突然周りが暗闇に覆われる。

一面の闇。何も見えない中で、誰かの声がした。

「ようこそ。君も『抽選』で当たったみたいだな」

誰がしゃべっているのか、居場所すら闇のせいで分からない。

「誰だよ……」

「俺はココの住人。君と同じ『当選者』だ。形を持つ魂体^{こんたい}。ここ
で生きて行ける権利を得た存在」

「はあ？いきなりなにいつてんだ。俺は死んでるんじゃないのか
？」

「君は確かに『死んだ』。が、魂は確実に命の鼓動を打っている。証拠に、今君は僕と話している。相当元気な魂なんだろうね」

「おいおいおいちょっとまで。話に全くついていけないんですが。文脈が読めんぞ。ちゅうせん？とうせんしゃ？なんなんだよそれ。殺すなら殺して生かすなら元の世界へ戻してくれ！気分が悪くて仕方ないわ！」

すると、さつきまで対話していた人物の声がブツリと途絶える。

なんだ？と思い、瞬きをした瞬間、目の前には巨大な白い十字架が一本地面に突き刺さっていた。

「これは……」

「俺がこの世界に来たとき、君と同じような行動を取り、同じようなモノを目撃した。爽焰ほのおも、この十字架も」

暗闇の中、淡い光を発しこちらへ近づいてくる人物がいた。

「お……お前は……！」

『苦』、あるのみ

「お前は……」

男。自分を殺したあの男。

自分の腹にナイフを突き刺した男。

光る男は全身黒のジャージ姿にフードを被っていた。

やはり殺した犯人か。

フードのせいで顔全体は見えないが、おそらく白髪の青年だろう。

「オマエ……よくも殺しやがったな！なんの恨みがあつて……」

遮るように、青年は言う。

「誤解しないでくれよ。俺が君を殺したんじゃない。君を殺した

のはこの十字架の意思さ」

青年は白い十字架の方に視線を向ける。

「十字架の・・・意思？」

「そう。この十字架は俺がここに来たときもあった。おそらくその前の人も。またまたその前の人も、これを見ているだろうな」

青年は透しほの方に振り返り、フードを取り除く。

瞬間、真つ暗闇だった空間が眩い光に包まれる。

あまりに眩しかったため、思わず右腕で両目をかばう。

目を開けると、そこはあの歩道橋だった。

やはり音は聞こえず、人とぶつかる気配がない。

ふと横に目をやると、白髪に整った顔立ちの青年が立っていた。

「ここは一体なんなんだ・・・」

青年は透の目をじっと見つめたあと、人が行き交う歩道橋をスタスタと歩いてゆく。

「お・・・おい！話しかけようにもコイツらには触れもできね・・・」

途端、青年と歩いていた女性の肩がドンとぶつかり合う。

女性は青年とぶつかったことに全く気づいておらず、キョロキョロと辺りを見回している。

「あれ・・・」

「君はおそらく、音を聞くこともできないし、この人たちに触れることすらできないだろう。それは君が死ぬ前まで持っていた『悔い』のせいだ」

「悔い？」

「そう。その『悔い』という雑念があの世界とこの世界の境界に引つかかっているんだ。例えるなら半開きのエレベーターのドアを強引に通ろうとしているようにね」

次に青年は走っているサラリーマンの正面に立つ。

このままぶつかれば鼻血ブーになってしまうだろうが・・・

フツ、と。音もなくサラリーマンが青年の体をすり抜けたのだ。

いや、青年がサラリーマンをすり抜けたのかもしれない。

「この世界のルールはこんなところだ」

「おい・・・！ちょっとまってよ！全くワケわかんねえ！なんなんだよ今の。おっさんがオマエの体をすり抜けたぞ?!」

「基本的に向こうの世界の生物はこっちの世界の人間を認知できない。だがこちらは向こうの世界の物体と接触、認識できる。同時、『悔い』が全く残っていないければ今のような芸だつてできる」

「壁抜け・・・とか？」

「んー。俺の場合は少しでも雑念が入ってしまうと壁に挟まれて動けなくなるね」

なんだよ。せっかく女風呂覗けると思ったのに、と卑猥なことを想像している矢先、

「で、君の悔いはなんなんだ？」

「はい？」

「こっちの世界で生きていくには、邪魔な雑念を抜いておく必要がある」

「待てよ。俺はまだここで生きるとか・・・」

「だったらあつちの世界に帰るか？・・・だがどうやって？」

「う・・・・・・・・」

実際そうだった。こんな変哲な世界に来てまだ間もない。分からないことが九割九分だっというのに、どうやって蘇れというのだ。

「ま。少しづつ慣れていけばいいさ。死んでる実感つてのが湧くかもしれないしね」

「死んでる実感つて・・・」

「そういえばまだ名を名乗っていなかったね。僕は寺田^{てらだ}聖^{せい}一^{いち}。よろしくね」

聖一は手を前に出し握手を要求してきたので透も手をだし要求に応える。

だが、透の手が聖一の手をすり抜けてしまった。

「あ・・・・・・・・」

「ははは。人と接触したいなら早く悔いを消すことだね」

結局こうなるのか、と透は肩を落とす。

いつのまにか、何事もなかったかのようにこの世界の存在を認め

てしまったのだが、これも十字架の『意思』なのだろうか。

自分の悔い。やり残したこと。それは……………

（あの社長をぶん殴る！！！！！！）

思考開始1秒で結論を出した透は、さっそく行動を始める。

駅の奥へ走っていった透を見て、聖一は口元を緩ませる。

*

「こりゃ楽だね~~~~~」

まったく人にぶつからず、人に見られることがないため、切符を
買う必要無し！乗車時込み合う必要無し！唯一不便なのは音が聞こ
えないことだろうか。

電車に揺られることおよそ10分。

透は自分が通勤していた製品会社に乗りに込んだ。

（来たぜ来たぜメタボ社長！！無責任なりストラしやがって・・・
・この恨みはらさでおくべきかああああ！！！！）

ものすごい勢いで階段を駆け巡り、開発室のオフィスに到達した
透。

真っ先に社長の目の前に行き、一言。

「殉職。お疲れ様です」

右腕を大きく振りかぶり社長の顔面目掛けて本気の右ストレートを食らわす。

はずだった。

「あらあ？」

さっぱり忘れていたのだ。今の自分が蟻ん子にすら一ミリたりともさわれないという事実を。

スカッ、と。間抜けな音がしたような気がした。

前のめりになり、社長元へ倒れ込む透。

「偽」、あるのみ

「しゃっ・・・社長!!どうしたんですか!!」

メタボ社長が激しくむせ返っているのを見た社員達は騒然としていた。

無論、透には社員が何を言っているのか分からないが、何故か社長のうめき声だけは聞こえていた。

同時に透は、

(バカなア・・・。この世界のモノには触れないんじゃ・・・)

すると、後ろから笑い声が聞こえた。それは社員の声、ではない。

「あははは。間抜けだねえ。この世界の人間に『殺意』をもったあと、それが解消されると自然にその人間を触れるようになるんだよ」

「・・・!!いややこしいルールだな!てか早くそれ言えよ」

何度も何度も口元をこすったあと、また聖一の話聞いた。

「……で？今は君の『後悔』ではなく、ただの『殺意』だ。君の本当の『悔い』はまだ残っているハズだろう？」

「……ああ……。もう少し時間をくれないか」

「もちろんだよ」

腹が立つ気持ちを抑え、抑えた結果社長に唾を吐き捨てる形で片付けた透。

未だに、ぶざまに騒いでいる社長の声が耳を叩く。

透達は会社をあとにした。

「じゃあ。ちと行ってくるわ」

「ああ。いってらっしゃい」

透の向かう場所。それは、家族の元だった。

自宅に戻る際、透はあるものを観た。

街中にある大きなヴィジョンに、自分の死亡事件のニュースが流されていた。

（本当に・・・死んだんだな・・・。これって夢なんかじゃない・
・よな・・・）

透は拳を握る。

（母さん達は・・・どう思ってるんだろうな）

気づくと透は自宅の前にいた。

ついさっきまで帰ろうとしていた場所なのに、なぜか世界一周したあとみたいな懐かしさを感じる。

そしてドアを開けようとしたとき、自分の手がドアノブをすり抜けてしまった。

ああ、そうか。と透は理解する。

そう思うと同時に、透は何も考えないままドアに手を突っ込む。す

ると、自分の手がドアのむこうまで貫通した。

その要領で体全体をドアに突っ込むと何事もなかったかのように家の中に入った。

（ほんっと気味悪いわこの世界。壁抜けできるなんて普通じゃねえよな）

ともあれ、家族の姿を探すことにした。

リビング、キッチン、洗面所。あらゆる所を探しても母親の姿は見られなかった。

（なんだ・・・葬式にでも言ってるのか？でも死んで間もないぞ俺・・・）

ハッと、透は気づく。

（それにしても変だ。俺が死んだのは今日のハズ・・・でもなんで俺の死亡事件がニュースで流れている？事件発生後最低一日はかかるはず・・・）

と、そこで透の思考は途切れた。

なぜなら。誰もいないハズの玄関の方から、聞こえるハズのない
声が聞こえたからだ。

「やーっとみつけたよ。随分探したんだから」

透はギョツとする。一瞬母かと思ったが、あきらかに敵意しか感
じられないその声に透は『母ではない』と結論する。

だが、

「さあ。透。早く私達のところへ戻ってきな」

声が。聞き覚えのある声だった。

より正確に言うと、それは『母』の声だった。

(なっ……どういう……)

とつさに洗面所に入り、息を潜める透。

(俺の姿は見えないんじゃないのか？なんで声が聞こえる？なん

でなんだ・・・)

「早く出ておいで。何もしないから」

(母さん・・・なのか?)

恐る恐る洗面所のドアを開ける。

その瞬間、自分の頭上に槍のような金属がドアを突き破り貫通した。

「・・・・・・・・！！！」

「みい〜つけた」

隙間から見えた姿は、普段通りの母そのものだった。

透は屍餅をついたまま、その『母』に話しかける。

「母さん・・・なのか?なんでこんなことするんだ・・・」

「なんでって・・・アンタは『知ってはいけないコト』を知ってし

まったから……。こっちに戻ってきてくれないとダメなのよ」

「こっち？」

「そう。もう一度死んでもらうわよ。透」

声を上げる暇はなかった。半開きだったドアは全開され、的確に胸を突くように槍の刃が迫る。

(死ぬ……………)

*

と思った瞬間。目の前に見知らぬ少年が表れた。

見渡すと、さっきまで居たはずの家の風景がない。母の姿も。

あるのは一面の荒野の景色。太陽が照り、地は枯れ、草木一本すら生えていない大地。

そして声がする。

『やあ。君もこの世界に迷い込んだ「当選者」かい？』

さっきの少年だった。服装は、なぜか自分が身に付けている制服と同じだ。

しかし、その少年の顔はクレヨンで白く塗りつぶされたようになっており、見ることはできない。

「オマエ・・・は？」

『それは教えるコトはできない。何故ならそれこそが僕の使命だからね』

「ここは？」

『ここは「君」自身。黒石透 自身の世界。何者にも染められず、干渉されない絶対自由の世界』

「どういうことだ。何を言ってるんだ？はやくここから出してくれ！母さんと話がしたい！」

『無駄だよ。もうあの世界に君の身内はいない』

「じゃあさっきの女の人は誰だ！母さん以外に誰がいる？」

『アレは君が造りだした「人形」さ。自分の空いた心を埋めるためのね。ちなみに君がさっきまで見ていた「向こうの世界」も君が生み出した虚像に過ぎない。こっちの世界では、君が信じているものは不用意に信じない方がいい』

「さつきから何を言ってるやがる。さっぱりわかんねえよ。死んだハズなのにワケの分からない世界にきて……。一体ここはドコなんだ……」

『果たして君は本当に死んでいるのかな？』

「え？」

すると少年は、小声でこつ言った。

『M e m e n t
『L i m o r r i』

透はその言葉の意味を理解できなかった。

『今君は、両足を縛られて生きている。断崖絶壁でね。そこから君がどんな生き方をするのか楽しみだよ。じゃあね。また会おう』

「おい・・・ちょっと待て!!！」

少年は荒野の土に溶けるように消えてしまった。

同時、透も意識を失った。

『因』、あるのみ

夢が覚めた。というより、生き返ったような感じだった。

透とおは聖せい一いちにたたき起こされる形で目が覚める。

一番に視界に飛び込んできたのはボロボロに崩れかけているコンクリートの天井だった。

そして、遅れて背中を這うコンクリート床の冷たい感蝕。

「……………ここは？」

「俺たちの『拠点』だ。そんなことより、なんで自宅で大の字になって倒れているんだ。気になってついて行ったのが不幸中の幸いだったか」

やれやれ、と腰に手を添え首を振る聖一。

「倒れていたって？」

「何にも覚えていないのか？」

質問したつもりが逆に質問されてしまったため、何も言えなくなる透。

「まあ、あの家で何があったのかは知らないが、『悔い』ははらせたみたいだね。証拠に、ホラ」

聖一の手から、何かが投げつけられる。

小さな小石だ。

「当然、こんな近距離でかわせる程運動神経は良くない。

カッーン、と。透の額に小石が当たる。

「いったー！ー！ー！ー！ー！」

「ほら。当たったろ？これでキミもこの的確者ってワケだね」

ニコニコと笑顔を浮かべる聖一をよそ目に、透は疑問を浮かべる。

（俺は何も『悔い』を晴らしたつもりはないぞ……。逆に『悔い』を増やしちまったんだと思うが……。それにアイツは……）

突然表れた荒野に、あの少年。

そして、あの言葉。

「ま、細けえことは気にしない気にしない」

「？何を言ってるんだい？」

「あ……いや……べつに……」

(あれは夢……だったのかな……)

一体どれを信じればいいのか、一体何を疑えばよいか。実際、自分が本当にこの世界に居るかどうかも疑わしいのに、こんなことを信じてもいいのだろうか。

謎が謎を呼び、疑問が疑問を生む。それが「人」本来の姿だ。

「というかビックリしたよ。何故かは知らないが洗面所で大の字になって気を失ってたんだから。この世界でもう「死んじゃった」のかと思ったけど。人を運ぶのはいつ以来だろうね」

「そりゃどーも」

「そんなことより、君に紹介したい人達がいるんだ。追ってきて」

「？」

*

どうやらここは、建築中止になった廃墟ビルのようなようだ。さっきまで居たのはビルの4階らしく、最上階は1・2階になるらしい。

壁や床等、ところどころがボロボロに風化している。逆に新しい所はというと、二階のリビングぐらいか。

そんなことで、透と聖一は2階のリビングに降りてきた。

「あ。目が覚めたんですね。例の人」

フロアを見渡していると、真つ先に女性の声が聞こえた。

声をした方に目をやると、案外立派な少女だった。

年齢は17歳程度だろうか。一言で言うところ『今どき』と断言でき
るくらいのファッションを着こなした茶色の長髪を持つ少女だ。

「ああ。この人も的確者だ。問題はないよ」

「また仲間が増えたんですね」

「しかもタダの『ヒト』じゃない。ここにきて早々、ほのお爽焰を出し
たんだ」

え？と、少女が驚いていると周りから次々と声が聞こえた。

『なんだって？ほのお爽焰を？ここにきて何日だ？』

『俺ですら出すのに4週間は掛かったぞ』

ざわざわとざわめき出すリビングを見渡すと、そこには様々な人
が居た。

透と差ほど変わらない年の少年・少女、あきらかに30を越えて
いるだろうという中年や、小学生程の小柄な少年もいる。

見たところ、軽く50人はいるだろう。

「……これは……」

「そう。選ばれたのは君だけじゃない。ここにいる人達も君と同じ『当選者』。十字架に選ばれた存在だよ」

「……つまり全員死んでると」

「変な言い方はよしてくれよ。僕たちはまだ生きてるんだから」

「ったく……。一体どうなってんだよ」

頭を掻いていると、さっきの少女が話しかけてきた。

「大丈夫ですよ。ここに来た人は全員同じことを言っていました。みんなそれぞれの『悔い』を晴らしてここにいるワケです。実際、私も未だに不安なんです。本当にここに居て大丈夫なのか？ってね」

「君も誰かに殺されたのか？」

「え？なんで分かったんですか？……まあ人の死因なんて、まっ先に思いつくのは殺されるぐらいしか思いつきませんよね」

「もしかして、フードを被った男とか？」

「え……。なんでそこまで……」

少女がドン引きしているのをよそ目に、透は眉を潜める。

（死因が同じ？こんな偶然ってあるのか？他人に殺されたなんてのはよくある話だが・・・）

「寺田さん」

「ん？なんだい？」

「あなたもフードをかぶった男に殺されたりしてないよな？」

「確かに、俺はフードをかぶった男に殺されたが。あなた『も』とはどういう・・・」

（死因は全員同じ？まさかな・・・）

透の思考はそこで途絶えた。

なぜなら、突然リビングに大声が響きわたったからだ。

「マズイぞ！奴らだ！！場所を突き止められた！！」

声を挙げたのはさっきチラリと見かけた30歳過ぎの中年だった。

「くっ・・・。中々早かったな今回は。みんな、屋上へ急げ！」

それを聞いた瞬間、場に居た全員が全速力で階段を駆け登ってゆく。

「ちょ……おい！どうことだよ！ちゃんと説明してくれエ！」

そこで、聖一に手首を掴まれ、強引にひっぱられる。

「とにかく！今は逃げないとダメなんだ。細かいことは気にしないんだろ！？」

「これの何処が『細かい』んだよ！エマージェンシーだろこれ！」

「うるさいよ！とにかく屋上へ急ぐんだ！あとはさっきのオジサンの指示を聞いて落ち着いて行動するんだ。避難訓練の本番みたいなものだ」

「え……っておい。』あとは』って？寺田さんはどうすんだよ」

「俺はここでちと時間を稼ぐ」

すると聖一は、みんなが走っている階段とは別方向行きの階段を下ってゆく。

「時間を稼ぐって……」

「新入り！！早く！！」

階段の上方から、誰かに怒鳴られたので急いで階段を駆け登った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1577z/>

黒いシト

2011年12月18日11時46分発行